

診療所だより



令和3年9月号外

神崎市国民健康保険脊振診療所
〒842-0201 神崎市脊振町広滝 555 番地 1
電話 0952-59-2321
診療所事務局（脊振支所）
電話 0952-59-2111

下着売り場でマスク考察

カミさんから、「コウスケ、子供たちをどっかでのびのびさせてきてちょうだい、私は料理してるから」と言われ、買いたい奥田民生のCDがあったから、〇〇タウンに来た日のことだ。

いきなり上の娘（5歳）が、「ミー君、かくれんぼしよう。最初はゲー、じゃんけん…」とチョキを出し、勝ったので一目散に走りだした。おいおい、のびのびしすぎだろう。ガキは無マスクに目をつぶってもらってんだから、おとなしくしろ。上の娘は、自称、かくれんぼで見つけたことがないらしい。ミー君（3歳）は、目をつぶり、数を数えだした。6と8がとんだ。



数え終わって、小さい身体から声を絞り出し「おねえちゃん…まてまてえー」と駆け出した。3歳児の飛沫ってどんなもんだろう。あとをつけざるを得ない。

上の娘がピンクの上下を着衣したマネキンのあたりで右折したのは視野に入っていたが、おいおい、女性用の下着売り場に隠れこんだんじゃねえか？ すぐ隣は子供服だから、せめてそっちのほうに行ってくれ。下着売り場は隠れる場所が豊富とは思えない。スカートもズボンもない。基本、更衣室はあるのか？ 男の俺にはわからない。

予想どおりミー君（3歳）は女性の下着売り場に入っていく。よしよし、健康な男子だ。しかし、売り物に隠れて他から見えないミー君（3歳）に比べ、大の男が女性の下着売り場をうろうろするのはかなり抵抗がある。艶やかな下着が目に入っても、わざと目をそらしたりしてしまう自分に、子供のころ本屋の大人の本を正面視できなかったことを思い出した。

ミー君（3歳）を見失わないよう、後ろをついて回らなければならない。所詮3歳児のスピードだ。でも、ゆっくり動く僕を他の人が見たら、変質者にしか見えないかもしれない。途中でミー君（3歳）が俺の視界から消えると、知らず知らずががんで足元を追ってしまっていて、振り向いていきなりマネキンのお尻、真っ赤な下着が頭の中に飛び込んでくるから、俺は何をしているんだろうと思った。

しばらくして俺は上の娘が隠れているのを見つけてしまった。さてミー君（3歳）が気づくか、ひっぱって転がしてみよう。

ミー君（3歳）は必死で探す。必死で探す。必死で探す。

でもそのうち飽きて、いろんなことを始めた。マネキンの下半身に飾ってある紺色の下着をお尻側から引っ張り、「のびる、のびる」と喜んでいる。当然俺は止めに入る。だめだよ、それはマネキンに対してもセクハラだ。大人になったら決してそんなことをしてはいけません。

でもミー君（3歳）も負けじと、今度は低い位置にあるマネキンのヒラヒラの付いた胸用下着に手を伸ばし始め、カップを真正面からつかみ、「のびない、のびない」と言い出した。3歳児とかゴムが伸びるのが不思議で、輪ゴムで遊ぶのが好きだから、わからんでもないが、胸用下着が伸びないことに気づくのは10年以上早すぎる。カップは、ひらひらとした飾りをつけるために伸びないようになっているんだ。伸びたらワニも蛇になる。最近、伸びる胸用下着で飾りなしもあるよと教えてやるにも、相手は保育園児だ。

下着に飽きたミー君（3歳）は、今度はにっこり微笑んでる店員さんに向かって指差し、「あ、お金の人」と言い出した。

ん？ ん？ ああ、なるほど。財布から五千円札を取り出し、口元を親指で隠してみた。店員さんは目元が樋口一葉にそっくりだ。じじいババアが孫可愛さに二人におこずかいをくれるが、二人に五千円札を一枚だけくれる。二人で分けなさいと。当然保育園児にはわかる、の意味が解らず引っ張ったりする。三歳児が引っ張っても日本銀行券はびくともしない。

店員さんは優しく笑っている。

よく考えていたら、胸用下着のカップや札のように伸びない素材があり、一方、股間下着のように伸びる素材がある。この違いはなんだろうか？

この間S先生に言われたことを思い出した。僕がスポーツタイプのウレタンマスクをしていたら「コウスケ、アサンのマスクは死を呼ぶマスクばい、布マスクもだめばい。ほれ、これに変えんしゃい」とア〇〇〇〇〇〇マの使い捨てマスクをくれた。

以下、その時のやり取り。

「コウスケ、不織布って、どがん意味か知っとっ？」「えーっと、分かりません」

「んなら、不、を外して織布は？」「織布、つまり織った布です」「布ば織るって、どがんこと？」「えーっと…」「アサン、鶴の恩返しって知らんとこ？」「しってますよお。あつ、そっか、カタンコットン、と鶴が織ってるのを男が見てしまいます」「そがん。お前もギターばもって、よく弾き語りで歌う曲があろうが」「どの曲ですか？」「縦の糸はアサン、横の糸はオイ」



つまり、織布というのは、縦の糸と横の糸がタテヨコ規則的に並んでいるということである。よく考えたら、洗濯したTシャツをハンガーに雑にかけたら、肩の変なところが出張って乾きあがることある。あれは織布ならではの伸びる原理だ。所詮四角形の集まりだ。股間下着だって伸びるということは織布のほうである。ちなみにウレタンの股間下着は聞いたことがない。

では不織布とはどういうことか？ 織ってはいない、という意味だ。確かに、使い捨てのマスクの素材は固そうなファイバーだ。それを不規則に幾重にも並べて作った平べったいものは、伸びないだろう。限りなく紙に近く、そうだ、お札みたいなもんだ。引っ張っても伸びない。

なるほど、そういうことか。「縦横に糸が並んで、口の隙間のある布」で作ったマスクはスカスカにウィルスを通すだろう。ウレタンマスクは伸縮性がいいから、引っ張って軽く伸ばせば、どこかに穴ができてくるように通気性がよくなるはずである。ミー君（3歳）が数を数えるときに6と8が飛ぶように。だから感染症対策には布マスクもウレタンマスクも向かない（「不織布はウレタンや布のマスクに比べ感染防止効果が高い」9月1日佐賀新聞より）。Sのおっさんが言うことは本当だ。

不織布マスクは全く伸びない。伸びないからヒダで立体的にしている。ヒダの意味はそういうことだ。下着の装飾とは意味が違う。

「おねーちゃん、いた」

と、ミー君（3歳）が走り出した。おねーちゃん、いた、が自分にも聞こえたはずなのに、まだ上の娘は動かない。となりの子供服売り場で、遠くを見る目線で、石川さゆりの最後のポーズのように右手を上げ、静止している。口元は笑いをこらえているようだ。同化してマネキンになり切っている。さすが、かくれんぼの女王だ。子供はのびのび、伸ばしたほうがいい。

（この物語はフィクションです）

肩書きにすぎたる男

(笑いは少々危ない人って思われないと、ダメなんだよ、ビートたけし氏談)

「おまえなあ、市役所のみんなだって、一生懸命やってんだよ。なんや、おまえのその態度は。出ていけ、お前のようなやつに射つワクチンなどねえよ」

デルタ株が流行っているとはいえ、白いダースベーターのような恰好をしたその医者は、俺を、お前呼ばわりし、罵倒した。俺は一瞬、頭が真っ白になった。極度の緊張に加え、市役所のチンタラした誘導にイライラして「散々待たせやがって、さらに30分も待たされるのかよ。仕事に間に合わない」と言ってしまった。でも、やばい、ばれたら困る。

「出ていけって言ってんだろがぁ」

その声はワクチン会場に響き渡った。

俺は、入り口からいろんな部屋をタライまわしにされて、やっとたどり着いたかと思って腕をまくったら、予診だけと言われて、カッとなって自分を見失った。その上、注射してから三十分も椅子に座ってじっとしてろと言われてたから、ついつい、仕事に、と言ってしまった。今日の仕事は怪しまれずに注射をうつことだ。

この頭のネジが外れた医者の激怒に、予診ブース2の看護婦さんもすこし焦っているようだったが、俺をブースから外につれ出した。

もう、俺はワクチンをうてないんだらうか？

必ず成し遂げないといけない、俺はまだまだ生きてやる。だから焦っていた。

思い返してみると、扇風機を市民には向けず、入り口に向かって全開で回している。暑がる俺たちは無視されている。ウレタンマスクをしているのに、もう一枚使い捨てのマスクをしろと言われてた。さらに暑いじゃねえか。しないと、注射しないと医者が言うらしい。おそらく、あの狂った医者の指示だったんだらう。でもうたないって言われるなら、ここは従うしかない。

最初の広い部屋に通されたが、延々とマスクの装着の仕方をビデオで流してやがる。なにが鼻の金具をW型に曲げるだ。ウレタンマスクのほうが口にフィットする。モデルのねえちゃんは色白で美人だが、ウレタンマスクを愛用する俺には関係がない。

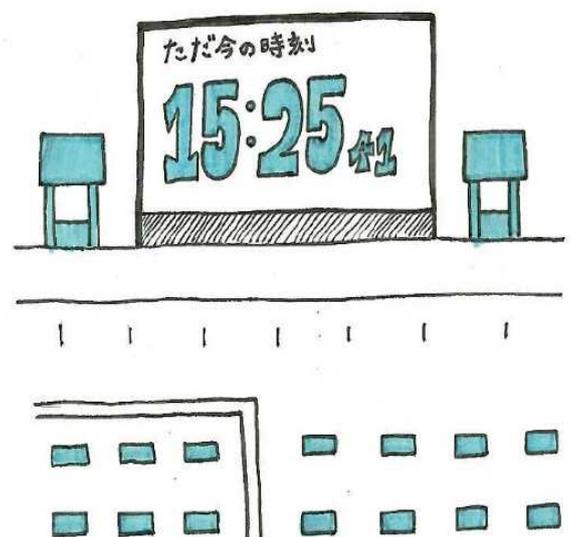
呼ばれたので次の部屋に行くと、長机がいっぱい並んでいて唖然とした。今度は何だ？ 女性から丁寧いろんなことを訊かれた。俺はこの歳になるまで何にも病気をしたことがないのに、いろいろと質問してきやがる。気を紛らすため、部屋を見回した。498と、大きいスマホのようなデジタル表示が数値を示している。3割引のコロケ、税抜き498円じゃあるまいし、あんなもん置いて何にも意味がないだらう。どこの市役所もやることなんて、昔から意味のないことばかりだ。例にもれず低姿勢だから、適当に流してやった。

やっと本会場に入ったかと思ったら、また沢山の椅子が並んでいる。おまけに椅子の間隔がやたらとあいてる。詰めて椅子を置いたら、もっと人が入って、タライ回しにされることはないだらう。で、またあのスマホのお化けがある。今度は596って表示してある。ご苦労ってことか？ 馬鹿にするのもほどほどにしておけ。

こんな不満が鬱積しているときに、俺は予診ブース2に呼ばれ

「散々待たせやがって、さらに30分も待たされるのかよ。仕事に間に合わない」

と狂気の、というより、その時はここまで変なやつとは夢にも思わなかったが、その医者に言ってしまった。そしたら、お前にうつワクチンはない、と言われた。



予診2から追い出された俺を市役所の人が丁寧に対応してくれた。薄皮一枚のパーテーションで区切られた隣の問診1で優しい医者がおだやかに迎えてくれた。眼鏡の向こう側の目が優しい。

よかった、なんとかワクチンがうてそうだ。俺は愛想のいい医者
の問診を終え、今度は接種待ちの場所へ移動させられた。

うってもらえそうだ！ よかった。とにかく、とっとと行って、
ずらかろう。注射ブースで待つ医者が笑いながら言った。

「S先生から、怒鳴られたってね。あいつは幕末だったら切り込
んで、とっとと死んでる。このあいだ集団接種の期間だけでもお
となしくしとけと言っておいたけどなあ」

俺と同世代のようだが、やたらと目力が強い。その後は頭の中が
真っ白だ。注射針を抜きながら、はい、お疲れさまでした、と声
をかけられた。そこまでしかおぼえていない。



目が覚めた。天井の明かりが目に入った。ピツピツピツと電子音が聞こえてきた。遠くで、先生、目を覚ま
したみたいですよ、と女性の声が聞こえた。

「どうですか、気分は？」

あれ？ 問診1の優しい目の医者だ。俺の顔を覗き込んでくる。

「あなたは、注射をうたれた瞬間、ぼったり倒れて、救急車で僕の病院に僕が同乗して連れてきたんですよ」

「ここ、どこ？」

「僕の病院。すぐ隣は新しくなった高校」

あの川沿いの。

「そもそもウレタンマスクは全く意味ありませんよ。ブスブスと外から針で刺した避妊具と同じです。僕は、怒鳴ら
れている様子をパーテーション越しに聞いていました。きちんとは聞こえませんでした。市役所のやり方を批判し
たんですよ。我々はみんな土日返上なんです。健康増進課とか残業続きで、曜日の感覚もないそうです。

入り口の扇風機の向きも、暑がる市民を涼ませるためじゃなく、本会場の換気を取るためです。すべて健康増進課の
計算づくで扇風機が並んでるんです。いくつもの部屋を経由して、タライ回しにされているように感じてらっしゃる
ようですけど、あれは密集を避けるため。一か所に大勢の人を集めないためなんです。二酸化炭素濃度が800ppm
以下になるよう扇風機で換気を取ってるんですよ。最後に30分待たされるのは、注射をうってから30分以内に、
平均17分という論文もありますが、ひどいアレルギーを起こす可能性が高いから、わざわざ危ない人と、危なくない
人を分けて区別してるんですよ。ここまで手際よく、肅々とワクチン接種をすすめるため、市役所は並々ならぬ努
力をしています。実はあなたと同じように、市役所を馬鹿にした医者もいました。S先生もその医者に頭に来てん
ですよ。そこで、貴方があんなことを言った、つまり市役所の批判をしたもんだから、S先生は激怒したんですよ。僕
は、あの医者のこと知ってますけど、常識の通じない、危ない医者です」

なにが危険な医者だ。あの医者、いつか仕返しをしてやらないと気が済まない。車を見つけて空気を抜いてやろう。
でも、この優しい目の先生には心を読まれていた、最重要な点を除いては。

「仕返ししてやろうと思ってるでしょ。やめといたほうがいいですよ。あの医者、診察室に金属バット持ってます。
高校生のころからガラが悪かったらしいですから」

ガラが悪くて……か。ガラが悪くても、医者になれるかもしれない。

「それに、おじいさんね。おじいさん、問診票で身元がばれてるから、下手なことできませんよ。今日、S先生があ
の場で問診票をビリビリに破らなかつただけでも、おじいさん、あなた幸運ですよ」

確かにそうだ。

でも替え玉で三回目を接種したことだけは、ばれずにすみそうだ。まだ死ねない。この地位はまだ譲れない。

(この物語はフィクションです)

脊振診療所 所長 桜木 徹